

ある時代の記憶

鹿児島県立大島高等学校 二年 橋口 綾乃

「ねえ、どうしてこれをとっておくの。」

その言葉に顔を上げると、十歳になる息子が指さしていたのは古い一本の三線だった。弦は切れ、胴の皮にも穴があいたそれが丁寧にたてかけられている光景は、なるほど彼には解せぬものだろう。

私は彼の隣に身を移し、彼と共にその三線に視線を注いだ。

「ひいおばあちゃんが、大事にしていたものだからね。」

「ひいばあちゃん。母さんのばあちゃん。」

「そう。」

答えながら私は、妙な気分にとらわれていた。息子からの質問は、私が彼とそう変わらぬ年の頃に祖母にしたものであったからだ。

私の小学校最後の年は、戦後七十年の節目の年だった。その年の夏に、私は同じことを祖母に尋ねた。祖母は、ただ捨てたくないからよ、と言って微笑んでいた。

そこで、今度は、祖母の姉―私の大伯母―に尋ねてみた。すると大伯母は、私と一緒にその三線を眺めながら語ってくれた。

祖母と大伯母の兄、つまり私の大伯父は、三線の演奏が得意で、二人も子供の頃はよく教えてもらっていたという。ちょうど太平洋戦争の真ただ中で、海軍の航空兵だった大伯父は滅多に島に戻ってこられなかったが、彼の事はよく覚えていると、大伯母は言った。祖母が数えで八歳になる年には、もう戦局はかなり悪化していた。その頃に、わずかな休暇を利用して大伯父が帰省してきたらしい。

祖母は再び、兄に三線を教えてほしいとせがんだ。そのとき、大伯母は母（私の曾祖母）を手伝って、なりの実の加工をしながら、その様子を少し離れたところから見ているそうだが、すると何故か、突然祖母が―幼い妹が泣き出し、走り去ってしまったという。驚いて、どうしたのかと尋ねても、彼は苦笑して、少し辛いことを言ったかい、と答えるのみだったらしい。それからしばらく、祖母は家の中ですすり泣き続けていた。

一体、どんなことを話していたのだろうかいねえ、と大伯母は三線を眺めたまま言った。そして先程までと同じように、私にも聞き取ることはできる島口で続きを語ってくれた。

大伯父が島にいられたのは、結局三日ほどにしか過ぎなかった。いよいよ出発するとうとき、家族は皆見送りに出て来たのだが、そのとき彼は、祖母に愛用の三線

を手渡した。

―大事にするんど、と言ひ残して。

返事を促されると、祖母は黙って頷いた。

こうして大伯父は、戦地に戻っていった。

それから二か月ほどたった頃、祖母達が暮らす集落の上空に、聞き慣れない音が響いた。相手の航空機からの機銃掃射だった。

畑にいた大伯母は、とつさに隣の妹を連れてそばにあった縁側の下にもぐり込んだ。次の瞬間、ズダダダダダと、すさまじい音が低いエンジン音に混じって祖母と大伯母の耳に突き刺さった。祖母と共に縁側の下に伏せ、息を潜める。幾度も幾度も響く機銃音、時折どこかでピカッ、と光る光、それらの一つ一つは、未だに大伯母の記憶にしっかりと焼きついていようだった。

そのとき、急に祖母が縁側から飛び出し、家の中にかげ上がった。大伯母は驚いて自分も思わず顔を出したが、またしてもズダダダダダと閃光が走り、慌てて首をひっ込めた。その瞬間、かなり低いところを飛ぶ飛行機が目に入り―それを見たとき、思わずはっとしたのだという。飛行機を操縦するパイロットの姿が、遠目に一瞬とはいえはつきりと見えたからだ。

―あの人達は人間なんだ。

それを見たとき、はつきりとそのことが分かったと、

大伯母は語った。祖母はすぐにまた家から飛び出してきた。

次の瞬間、もう何度目か分からない機銃音が、今までよりもずっと大きく、つまりずっと近くで、響き渡った。倒れ込むように地面に伏せた祖母を、大伯母は必死で再び縁側の下に連れ込んだ。固まったまま、ただひたすらじっと待つ。

しばらくして、周囲のすさまじい音はおさまった。やっと外にはい出た大伯母は、妹がしっかりと三線を抱きかかえていることに気付いた。

―不思議なことに、三線の胴には機銃の跡で間違いない穴がしっかりと空いているのに、それを持つ彼女の体には、傷一つない。そして祖母は、その三線を固くつかんだまま、呆然とした様子で、あ兄が、あ兄が、あ兄が、とつぶやき続けていた。そんな妹を、大伯母はただ身体をこわばらせて見つめることしかできなかった。

ほどなくして、大伯父の戦死通知が祖母達の元に届いた。記された日付は、集落が機銃掃射を受けた日と、同じだったという。

聞き終えたとき、私は何を感じたのだろうか。今になっても、うまく言葉で言い表せない部分がある。ただ、黙って隣の大伯母の顔を見上げたことは覚えている。

大伯母はしばらくじっと三線を見つめていたが、やが

てゆっくりと私の方を向き、穏やかな笑みを浮かべながら、共通語で言った。

「あなたが大人になる頃、あの時代のことはどう語り継がれているのだろうねえ。」

その声は、三十年たった今でも、なぜかはつきりと耳によみがえらせることができる。

戦争はもう、百年も前のことだ。当時のことを身をもって体験し、語ることでできる人は、当然のことながらもう全くと言っていいほどいない。あるいは私たちは、あの時代を知る方々から直接「戦争」を聞くことができた、最後の世代であったかもしれない。

「お母さん。」

不思議そうな顔で、息子がこちらを見上げていることに気付いた。

黒い瞳に、電灯がきらりと映り込んでいる。

祖母と、大伯母と……顔も知らないはずの大伯父の姿が、浮かんだ気がした。

ならば私は語り継ごう。あの時代を知らない私達にできることを、考えていこう。それがきつと、私達の役目なのだ。戦争を直接見てはいないけれど、「聞く」ことはできた世代の、務めなのだ。

努めていつも通りの笑みを返し、私は、そっと息子の髪に触れ、それからゆっくりと語り出した。祖母たちが

私たちに伝えてくれたことを、次の世代に。あの時代の記憶を、次につないでゆくために。できる限りの、誠意を込めて――。

